

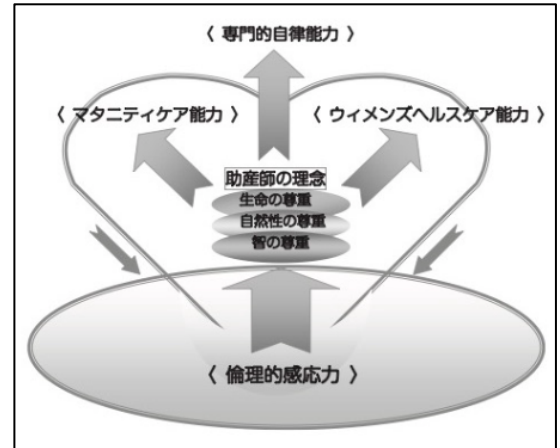
医療施設で勤務する助産師の助産実践能力に関する研究

看護学科 助産・母性看護学領域 中村 彩希子 助教



Q. どのような研究をされていますか？

A. 日本では、少子化や妊産褥婦のハイリスク化、育児の孤立や負担感増大、児童虐待の増加など、周産期医療や母子保健に関する課題が山積しています。それらに対して展開されている様々な施策の中で、女性の性と生殖に関する専門家である助産師の活躍が期待されています。社会から寄せられるニーズに合わせて、助産師に求められる役割や能力も拡大しています。しかし、病院や診療所で勤務する助産師は、周産期の正常経過に関する実践能力は獲得できているものの、ハイリスクや地域における育児支援、周産期以外の女性のライフステージに関する実践能力は十分に獲得できていないことが明らかになっています。わが国の就業助産師の多くを占めている医療施設で勤務する助産師が、社会から求められている助産実践能力を獲得して、さらに活躍するための方略について探究する研究に取り組んでいます。



助産師のコア・コンピテンシーのイメージ図
(助産師のコア・コンピテンシー2021,日本助産師会,2021)

Q. これまでどのような研究をされてきましたか？

A. 近年、少子化による分娩件数の減少や病床の有効活用のために、医療施設の産科病棟では混合病棟化が進んでいます。産科混合病棟で勤務する助産師の多くは、産科の妊産褥婦だけではなく、産科以外の診療科の患者も受け持ちケアを行っている現状があります。助産師は、妊産褥婦に対して十分なケアを行えていない葛藤やモチベーションの低下を感じており、助産師としてのキャリア形成の阻害にもつながっていることが報告されています。しかし、様々な対象者に多岐にわたるケア経験をしているからこそ得られる学びもあるのではないかと考え、産科混合病棟の助産師が認識するケア経験と助産実践能力について研究を行いました。その結果、【助産師1人の重責を感じる勤務経験に基づく、産科領域の的確な判断と調整能力】【他科患者へのケア経験に基づく、広い視野を持ったアセスメントと調整能力】【他科患者の人生に触れた経験に基づく、長期的な視点で退院後の生活や育児を考える能力】などを得られたと認識していることが明らかになりました。この結果は、産科以外のケア経験からも助産実践能力が獲得できることを示唆していると考えています。

Q. 将来の展望をお聞かせください。

A. いま助産師がおかれている環境の中で、どのように助産実践能力を獲得・向上していくことができるのかを検討する必要があると考えています。ケア経験と助産実践能力との関連をエビデンスとし、能力獲得につながる経験を意図的に積めるようなキャリアローテーションの開発を目指しています。

もう少し知りたい!と思った方はこちらへ

・助産・母性看護学領域 URL

➡ https://web.sapmed.ac.jp/jp/school/health/course/ns/ns_bosei.html

・大学院保健医療学研究科看護学専攻女性健康看護学 URL

➡ https://web.sapmed.ac.jp/jp/school/graduate/health/g_ns/ahfmc00000013wl.html